

今月の主な内容

4・5面：学生ボランティア 春からのゆくえ
7面：関学4年ぶり学生日本アメフト



携帯HP

神戸大学ニュースネット

NEWS NET

©神戸大学ニュースネット委員会 http://home.kobe-u.com/top/newsnet/
関西学生報道連盟共同編集室=〒532-0011大阪市淀川区西中島4-2-24ダイエール4階
電話06-6307-1315 FAX06-6829-6353 メール info@unn-news.com

2012年震災特集

大学、学生、遺族
それぞれの17年
2、8面へ

1月号

阪神・淡路大震災17年
歩んできたこの道

昨年の3月11日、東日本大震災が発生した。神戸大も大学として、また学生が自主的にさまざまな形で支援に乗り出した。これからは本格的に復興への道のりが始まるだろう。

一方、阪神・淡路大震災から17年が経過した。神戸の街はずっかり綺麗になり、当時のことを覚えていない世代が大学生になりはじめた。

神戸大は「あれから」という道を行ってきたのだろうか。教訓は受け継がれているのか。また、当時学生を亡くした遺族の方は17年を経て、東日本大震災が発生した今、何を思うのか。

大学、学生、遺族それぞれの17年を振り返ってみたい。

遺族の17年
上野政志さん

上野さんは、阪神・淡路大震災で当時2年生だった娘の志乃さんを失った。志乃さんを失ったくない、その思いから志乃さんが亡くなったアパート跡に地主の許可を受け、ほころを建てた。上野さんは3つの地蔵が鎮座するそのほころを「三地藏の種」と名付け、神戸に来る際には必ず訪れていた。また、普段から震災のミニメントの一つとしてお参りに来ている人もいたという。



神戸大生3人が亡くなった西尾荘後に捧げられた供え物や花束(ニュースネット委員会貯蔵)

地主から道路拡張のため「箱」の撤去を言い渡された。それを受け上野さんは、「箱」の上に置いていた御影石を加工し、昨年1月から慰霊碑として設置。アパート跡にできた駐車場に置かせてもらう許可を受けた。これまでと変わらず毎月慰霊碑を訪れていた上野さんだったが、昨年8月17日、いつものように駐車場に訪れると、慰霊碑はなくなり、「石」があった場所には住宅の新築工事が始まっていた。

「誰かが故意に取っていったのか、工事の際に間違えて撤去されてしまったのかさっぱりわからない。現在、新聞やメディアの協力を得て情報提供を募っているが、未だ有力な情報は得られないまま。今の神戸には、震災を直に経験したくない人も多し。上野さんは、神戸の地に寂しさを感じるという。

学びを生かし150万円売り上げ
起業家精神育成ゼミ

12月14日、六甲台キャンパスのアカデミア館40号室は熱気に包まれていた。学生らは株式会社ビッグマ代表取締役・太田智文氏の熱弁に聞き入り、太田氏は困難にぶつかるとき「日本一それができる」という思考法などを紹介。学生側も積極的に発言した。

「教訓は生かされているのか」
「2面に掲載
8面に掲載
考える」

模範店やキャンパスツアーなどをを行い、合計約150万円を売り上げた。最も売りがけに貢献したのは高校生対象のキャンパスツアー。高校生14人を集めた約75万円を売り上げた。

「起業家精神」を養成する。11月の六甲祭で

「卒業生「やりきった」
はちの巣座最終公演」

12月5日、演劇研究会はちの巣座の27期生卒業公演「僕たちの好きだった革命」(作・鴻上尚史、演出・クサカナムリ)の全日程が終了した。はちの巣座でこの公演を最後に9名の4年生が卒業。卒業を迎えた大木佳昭さん(理・4年)、児玉華奈さん(理・4年)に話を伺った。

「卒業生「やりきった」
はちの巣座最終公演」
卒業公演では、主人公の母親役を見事に演じた児玉さん。「1つの公演が終わる度にやりきった感があるので、最後も卒業という実感がなかった。4年間出演した公演は10回以上あるので、中でも児玉さんの印象に残っているのが、自らの新人公演「Goodbye」(作・大橋泰彦、演出・KOBÉ ver.)で演じたモスラ役。経験者として、

「伏流水」
ニューズネット委員会は阪神・淡路大震災をきっかけに立ち上がった団体だ。17年間毎年報道してきた▼私は1995年1月17日、大阪に住んでおり、4歳になる直前だった。震災のことは覚えていない。ニューズネット委員会に入部するまでは17はセンター試験の日という認識だった。震災についてはテレビや新聞で目にするも大きな関心を払うことがなかった▼入部して早々、先輩に1月17日は予定を空けてどのように言われたときは「ん」と言われた。震災取材をはじめたところ、当時17歳だった学生の方に話を聞き、震災がいੱき身近に迫ってきた。自分の大学で起こった悲劇を実感した。それ以来、遺族の方、学生、大学などさまざまな取材をした▼我々は紙面で震災の記憶や教訓を伝えようとしている。何か「ふつ」の学生の心を動かすような記事を書けないかと苦心する。難しいのは分かっている。私にニューズネットに入っていないから、それほど関心を持たなかったかもしれない▼しかし、これは学生44人を失った神戸大だ。古今まれな経験をもつ大学として少しでも震災というのに関心をもち学生が増えればと思う。

スマイル
笑顔が素敵な神戸大生紹介する「スマイル」。第9回は2011年に活動再開を果たした書道研究会の会長、市村達大さん(経済・1年)。

活動再開までは地道な努力を重ねた。部員を集めるために友人、その友人までも勧誘し、大学当局とも顧問や備品のことで何度も交渉したという。その努力もあって、11月には念願の六甲祭出展も果たし、研究会は勢いに乗っている。

「毎週欠かさず練習していきたい。活動の基本がぶれると廃部に逆戻りする恐れがありますからね。あとは新歓で1回生に入ってもらいたい」と市村さん。今後の研究会の拡大に期待したい。【片山孝章】

敗北で6位終幕
アメフト最終節
関西学生アメフトリーグ第7節、神戸大・熊谷大が11月26日、エキスポラックシユフィールド(大阪府)で行われた。神戸大は第3QにRB大仲(工・4年)のTDなどで追撃するも及ばず、12-24で敗れた。最終成績は5勝5敗、6位。リーグ戦を終え、神戸大は昨年同様順位を一つ落とした。悔やまれるのは初戦の京都大戦(13-26)。萬谷ヘッドコーチは「その後の強豪との戦いに備えて、初戦の京大に勝ったことが」と話した。

チームの戦力としては、RB羽星(発達・3年)やWR中島(海事・2年)ら主力を欠け、万全ではなかった。苦しい状況を支えたのは、控えて回っていた4年生。第6節で入れ替え戦回避を決めたRB種(海事・4年)らが奮起した。SF梅本主将(経営・4年)は「もっと勝ちに貪欲なチームになってほしい」と後輩を激励した。一方、来年は4年生としてチームを引っ張ってほしいと、神戸大は古きよき経験をもつ大学として少しでも震災というのに関心をもち学生が増えればと思う。

【石橋雄大】

阪神・淡路大震災特集

神戸大に問う

震災の教訓は今に生かされているのか

神戸大は阪神淡路大震災によって大きな被害を受けた。あれから17年が経ち、建物や様子は震災の影も残っていないように感じる。だが、それだけで本当に復興したといえるのだろうか。また、今後神戸で災害が起こった時にどう対応するのか。神戸大が災害に対して強い大学になっているのか。阪神淡路大震災で起こったことを踏まえながら今の神戸大の防災策、そして防災意識について検討する。

震災の教訓は今に生かされているのか

神戸大は阪神淡路大震災によって大きな被害を受けた。あれから17年が経ち、建物や様子は震災の影も残っていないように感じる。だが、それだけで本当に復興したといえるのだろうか。また、今後神戸で災害が起こった時にどう対応するのか。神戸大が災害に対して強い大学になっているのか。阪神淡路大震災で起こったことを踏まえながら今の神戸大の防災策、そして防災意識について検討する。

大学本来の役割 見失うな

災害が起きたとき、大学には何が求められるのか。東日本大震災において学生連と共に行ったワークショップを行って、岩手県大船戸を拠点として積極的にボランティアに従事している発達科学部の松岡広路教授にお話を伺った。

都市安全研究センター

一方、大学も災害が起きた際、地域社会に対して積極的に支援していくべきだとする考えもある。都市の安全と安心を確保するための総合的な研究を目的に1996年に設立された都市安全研究センターでは、地域の協力は必要不可欠な活動を進めようとしている。同センターで復興計画に関する研究を行い、阪神淡路大震災の際、実際に

大学側も積極的な支援を

一方、大学も災害が起きた際、地域社会に対して積極的に支援していくべきだとする考えもある。都市の安全と安心を確保するための総合的な研究を目的に1996年に設立された都市安全研究センターでは、地域の協力は必要不可欠な活動を進めようとしている。同センターで復興計画に関する研究を行い、阪神淡路大震災の際、実際に

加藤貴光さんの母 加藤律子さん

広島在住の加藤律子さんには震災当時、神戸大に通う一人息子の加藤貴光さん(当時法学部2年)がいた。亡くなったことを知り、「その場で崩れ落ちてしまっ、そこから何日かあまた記憶がない」ほど大きなショックを受けた加藤さんを救ったのは、「周囲の人との交流だった」。

遺族の17年

阪神・淡路大震災の発生から17年の時がたとうとして、息子の白木健介さん(当時経済3年)を亡くした父、利周さんは今年も「17のついで」運営スタッフとして1月17日を東遊園地で迎える。阪神・淡路大震災から立ち直れない人々を迎え、静かな時を過ごす場所を設けることも、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地にも、メッセージを発信していく。

白木健介さんの父 白木利周さん

利周さんはNPO法人「白木利周さん」の代表理事。震災の経験から、被災地の人々の深い信頼関係を生かして、被災地を支援できる「再生」を、少しでも高台に作り直して、津波に強い町を作りたいという思いで、利周さんたちの震災への取り組みは、これからも続いていく。

本来自然災害に際しては避難民の受け入れに関し、施設を避難所として神戸市に提供することが大学の役割であり、インフラの管理は地方自治体、すなわち神戸市が責任を持つ。だが、神戸大にある避難所は市の管理や監督権が及ばない施設であったため、市と大学による二重構造の運営が行われた。

国際化学部キャンパスは、本来災害時の市の避難所指定されていなかった。しかし、避難所となっていた近隣の小学校が避難住民を受け入れられなくなったため、まほろば区がキャンパスの開放を要請し、周辺に住む避難民の受け入れを要請された。17日夕方から19日にかけて、教養と体育館に避難住民を受け入れた。急遽避難所として機能することになったため、救援物資の配給がうまくいかず、一時は避難住民を学内の避難所では最大の約1600人抱えた状態で、毛布が住民の4分の1にしか配布できない状況にまでなった。

阪神淡路大震災の際、実際に被災者の詰めかけた(1995年1月27日・ニュースネット委員会貯蔵)

阪神・淡路大震災特集

学生ボランティアを考える

昨年3月11日に発生した東日本大震災から10ヶ月。神戸大の学生の中にも、様々な形でボランティアを続ける人がある。そして、阪神・淡路大震災から17年。ニューズネットでは、ボランティア支援室コーディネーターの藤室玲治さんから、当時の経験とボランティアの意義を伺い、同時に現在の学生ボランティアにその心中を聞いた。



西尾荘の焼け跡 (神戸大ニューズネット委員会貯蔵)

「素人の学生だからこそ」

学生支援室コーディネーター 藤室玲治さん

ボランティアをやりたい学生と、受け入れ先との仲介を務める藤室さん。阪神・淡路大震災の発生当時、国際文化学部の2年生としてボランティア活動に関わった。

阪神・淡路大震災が起きた直後、まず気になったのは高校の同級生の安否だったという。連絡の取れない同級生を探しに避難所に向かった。しかし、そこで目の当たりにしたのは、疲れ切った表情を浮かべた避難者たちの姿だった。「被災地の人に何かしようと思ったんですけど、それを見てからしばらくは何もできなかった」と、藤室さんは当時の無力感を語った。

ボランティアをやりたい学生と、受け入れ先との仲介を務める藤室さん。阪神・淡路大震災の発生当時、国際文化学部の2年生としてボランティア活動に関わった。

阪神・淡路大震災が起きた直後、まず気になったのは高校の同級生の安否だったという。連絡の取れない同級生を探しに避難所に向かった。しかし、そこで目の当たりにしたのは、疲れ切った表情を浮かべた避難者たちの姿だった。「被災地の人に何かしようと思ったんですけど、それを見てからしばらくは何もできなかった」と、藤室さんは当時の無力感を語った。

ボランティアをやりたい学生と、受け入れ先との仲介を務める藤室さん。阪神・淡路大震災の発生当時、国際文化学部の2年生としてボランティア活動に関わった。

阪神・淡路大震災が起きた直後、まず気になったのは高校の同級生の安否だったという。連絡の取れない同級生を探しに避難所に向かった。しかし、そこで目の当たりにしたのは、疲れ切った表情を浮かべた避難者たちの姿だった。「被災地の人に何かしようと思ったんですけど、それを見てからしばらくは何もできなかった」と、藤室さんは当時の無力感を語った。

ボランティアをやりたい学生と、受け入れ先との仲介を務める藤室さん。阪神・淡路大震災の発生当時、国際文化学部の2年生としてボランティア活動に関わった。

阪神・淡路大震災が起きた直後、まず気になったのは高校の同級生の安否だったという。連絡の取れない同級生を探しに避難所に向かった。しかし、そこで目の当たりにしたのは、疲れ切った表情を浮かべた避難者たちの姿だった。「被災地の人に何かしようと思ったんですけど、それを見てからしばらくは何もできなかった」と、藤室さんは当時の無力感を語った。

「出来る限りのことを」

小林恭子さん (発達・1年)

「1回被災地に行ってみてほしい。震災のことがもっと身近に感じられますよ」と語った小林さん。以前からボランティアに行きたいと思っており、ボランティア先の先生にもその旨を話していた。夏休み、その先生が知人を集め、宮城にある児童デイサービスセンターへボランティアに行きた。そこには被災地へ林さんも誘われ、被災地へ行くことになった。児童デイサービスセンターは発達障害のある子供たちが、日中だけ一時的に利用できる施設。被災地に降りた当初、小林さんは自分のふがいなさに気づかされ、沈んだという。センターのスタッフの

小林さんは最後に「(被災地に)1回行ってたらその土地に寄り添いたくなりまして。もう1度行きたいですね」と微笑んだ。これからの小林さんの被災地へのさらなる貢献に期待したい。

【小野学】

学生ボランティアの「今」

「未経験者も活動に」

黒木宏太さん (発達・1年)

東日本大震災後の5月、黒木さんは迷いながらも「ここに行く」という思いで、ボランティアサークル「ほらほら」の活動に参加し、被災地に赴いた。活動後も支援を続けていきたいという思いから、有志を結成。9月には再び被災地でボランティアを行った。現在は「11えん募金」を立ち上げ、毎月1日に神戸で募金を行うなど、精神的な活動を続けている。だがそんな黒木さんも、迷いの時期を迎えているという。

黒木さんは「5月の段階では、皆に1人で被災地

「被災地に行くって、手伝いや、1対1の子供の世話などの仕事があったり、全くと役に立った感じがしなかった。でも、児童デイサービスセンターへ行って、被災地へ行くことになった。児童デイサービスセンターは発達障害のある子供たちが、日中だけ一時的に利用できる施設。被災地に降りた当初、小林さんは自分のふがいなさに気づかされ、沈んだという。センターのスタッフの

「救援隊代表として」

平尾知香さん (法・3年)

「元々ボランティアしようと思っていたわけでもない」と話始めた平尾さん。学生が主体となって開催する地域の祭り「灘チャレンジ」にある時来場した、「道徳の授業で習った」一歩遠いところにいる」と感じると力説した。

小林さんは最後に「(被災地に)1回行ってたらその土地に寄り添いたくなりまして。もう1度行きたいですね」と微笑んだ。これからの小林さんの被災地へのさらなる貢献に期待したい。

【小野学】

「被災地に行くって、手伝いや、1対1の子供の世話などの仕事があったり、全くと役に立った感じがしなかった。でも、児童デイサービスセンターへ行って、被災地へ行くことになった。児童デイサービスセンターは発達障害のある子供たちが、日中だけ一時的に利用できる施設。被災地に降りた当初、小林さんは自分のふがいなさに気づかされ、沈んだという。センターのスタッフの

「被災地が身近に」

曾東安里紗さん (農・2年)

農学部で食料問題について学んでいる曾東さんは、大学内外で様々な活動をする行動派だ。神戸大学TFTの代表として、世界の食の不均衡を解消するために、岡本のカフェと協力し、売り上げの一部を途上国に寄付しているほか、ユース六條のメンバーとして、篠山市福住地区で農家イベントの手伝いをしている。それ以外にも、農学部で食と農業に関する勉強会を主催している。

色々な社会問題に関心を持ち、その問題への関わり方を模索しようとする曾東さん。自ら積極的に社会に関わっていく姿勢が印象的だが、「ボランティアをしている」と

「被災地に行くって、手伝いや、1対1の子供の世話などの仕事があったり、全くと役に立った感じがしなかった。でも、児童デイサービスセンターへ行って、被災地へ行くことになった。児童デイサービスセンターは発達障害のある子供たちが、日中だけ一時的に利用できる施設。被災地に降りた当初、小林さんは自分のふがいなさに気づかされ、沈んだという。センターのスタッフの

編集後記

「震災のことを振り返りて取材なんて重い」。私は、震災という命に真正面から向き合う内容を扱うのに、正直はしめはかなり構えてしまっていた。問題意識を持つより先に、相手の気に障るようなことを取材で聞いてしまわないかとはかり考えていたのだ。

昨年12月、私は、阪神・淡路大震災の遺族であり、現在は「1・17希望の灯り」の理事として活動を続けておられる白木利周さんにインタビューをした。遺族の方というだけで委縮していた私だが、その白木さんの言葉は私の意識を根底から覆した。

「どん底の時期もあった。でも皆さんに命の大切さを伝えられる立場になったというのは、幸せなことなのかもしれない」。目の覚める思いがした。震災で心の傷を負われた方々が、その暗い過去を語っても伝えようと努力されている姿は、私の心に響いた。

「記者として、震災に向き合おう」と真の意味で考えられるようになった点で、あの話は本当に聞いてよかったと感じている。

しかし、私は阪神・淡路大震災の記憶がない世代だ。そんな者の言葉で、震災を誰かに伝えられるのか。記事の1字一句に何時も悩んだ。他人を完全に理解することなど、到底できないことも痛感した。

だからこそ、この震災特集を少しでも多くの人に読んでほしい。決して巧みな文章ではない。しかし、時間をかけた方、伝えたい思いは全部書いたつもりだ。この震災特集を読むことによって、一人でも震災を考へる人が現れることを願っている。

【片山孝章】

「被災地に行くって、手伝いや、1対1の子供の世話などの仕事があったり、全くと役に立った感じがしなかった。でも、児童デイサービスセンターへ行って、被災地へ行くことになった。児童デイサービスセンターは発達障害のある子供たちが、日中だけ一時的に利用できる施設。被災地に降りた当初、小林さんは自分のふがいなさに気づかされ、沈んだという。センターのスタッフの